

## 病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

## 特に注意！（3月）

## たまねぎ：べと病



越年り病株の症状

## 特徴

- ◆ 育苗時や定植後に、被害残さ等から感染し、越年り病株として1～2月に病徴を現し、周辺への伝染源になる。越年り病株は、葉色は光沢のない淡黄緑色で、生育も劣る。

## 防除のポイント

- ◆ 越年り病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、ランマンフロアブル、ダコニール1000などを予防的に散布する。

なす（施設栽培）：  
灰色かび病

被害果

## 特徴

- ◆ 咲き終わった花卉や幼果に感染しやすく、20℃程度の多湿な環境条件や過繁茂で発病が多くなる。

## 防除のポイント

- ◆ 適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコート水和剤、セイビアーフロアブル20等を、発生を認めたら、ゲッター水和剤、ファンタジス夕顆粒水和剤などを散布する。
- ◆ 開花後の花卉を取り除く。
- ◆ 同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

なす（施設栽培）：  
アザミウマ類

ミナミキイロアザミウマ成虫※

## 特徴

- ◆ ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。なお、ミカンキイロアザミウマの果実被害は、「水なす」で目立つ。

## 防除のポイント

- ◆ 苗からの持ち込みによる発生に注意する。
- ◆ 育苗期後半～定植当日にモベントフロアブル、アベイル粒剤等を施用する。
- ◆ 発生が見られたら、アフーム乳剤、ファインセーブフロアブル、バストガード水溶剤(ミナミキイロアザミウマ)などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。

次回の情報は3月下旬にお知らせします。

◎「防除指針」 <http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>

引き続き、Google Chrome等で大阪府病害虫防除グループホームページが開かない障害が発生しています。  
閲覧の際はApple Safari等からご覧ください。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

## 水稻

### ジャンボタニシ (スクミリンゴカイ)



成貝



卵塊

#### 特徴

- ◆ 成貝の殻高は2～7cm程度。田植直後(約20日間まで)の小さな苗のみを食害する。繁殖力が強く、多数の個体が苗を食べつくすこともある。
- ◆ それ以外の時期に被害はないが、個体数を減らすことが肝要。

注)成貝の写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稻の被害を防ぐために」より引用。無断転載を禁ずる。

#### 防除のポイント

- ◆ 耕うん機等の土に貝が混じり、他の水田に移動させてしまうことがあるので、移動の際は器具についた土をしっかりと落とす。
- ◆ 本貝には人体に有害な寄生虫(広東住血線虫)がいる場合があるため、ゴム手袋やゴミ拾い用トング等を使用し、素手では扱わないようにする。もし、素手で触った場合には、石けんで手をよく洗う。
- ◆ 春期の石灰窒素散布の手順は、下記の農林水産省「スクミリンゴガイ防除対策マニュアル(移植栽培)」の13ページを参照。

農林水産省・安全局植物防疫課令和5年「スクミリンゴガイ防除対策マニュアル(移植栽培)」はこちら  
[https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryou2/sukumi/PDF/sukumi\\_manual.pdf](https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryou2/sukumi/PDF/sukumi_manual.pdf)

カラー技術資料「ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)から稲を守りましょう！」はこちら  
<https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/318/00000000/tanishi2017.pdf>

## 果樹

### ぶどう (加温栽培)

#### 灰色かび病



花がらでの症状

#### 特徴

- ◆ 多湿条件で発生が多くなる。
- ◆ 胞子が雨や風によって飛散し、傷口等から感染する。

#### 防除のポイント

- ◆ 適切に換気を行い、湿度を下げるようにする。
- ◆ 第1回ジベレリン処理から結実始めの間にビニルでマルチングをする。
- ◆ 花がらが発生源となることが多いので、開花後に花がらを取り除く。
- ◆ 開花直前または落花直後にゲッター水和剤、スイッチ顆粒水和剤、オンリーワンフロアブルなどを散布する。

## 果樹

## ぶどう（加温栽培）

## ハダニ類



カンザワハダニ※

## 特徴

- ◆ 加温機の近くやダクトの先端部等、高温になりやすいところから発生することが多い。

## 防除のポイント

- ◆ 発生を確認した場合は、マイトコーネフロアブル、ダニコングフロアブル、ダニトロンフロアブルなどを散布する。

## ハスモンヨトウ



幼虫\*

## 特徴

- ◆ 幼虫が葉や新芽を食い荒らす。
- ◆ 卵は100個くらいの塊で葉に産み付けられるので、卵からかえった幼虫が集団で葉を食べる。
- ◆ 早期加温栽培では3～4月に被害を受けやすい。

## 防除のポイント

- ◆ 幼虫が集団で発生している葉を切り取って処分する。
- ◆ 発生を確認した場合は、エクシレルSE、コテツフロアブル、ディアナWDGなどを散布する。

## クワゴマダラヒトリ



幼虫※

## 特徴

- ◆ 成虫は年1回、アカメガシワ、ニセアカシア、カラスザンショウ等に産卵する。
- ◆ 越冬は、主に中齢幼虫で落葉や樹木の地際部で行う。越冬後、3月以降に幼虫が移動しブドウの新梢や葉を食害する。

## 防除のポイント

- ◆ 生育初期に新梢の生長点が加害されると、被害が大きいため初期防除に努める。
- ◆ 発生を確認した場合は、エクシレルSE（ケムシ類）、フェニックスフロアブル（ケムシ類）、オリオン水和剤40などを散布する。



## 果樹

### いちじく

#### ハダニ類、カイガラムシ類



カンザワハダニ※



フジコナカイガラムシ幼虫※

#### 防除のポイント

- ◆ 夏期の被害をおさえるため、被害の多いほ場では3月中旬（発芽前）に石灰硫黄合剤を散布する。

## もも

#### せん孔細菌病



春型枝病斑

葉の病斑

#### 特徴

- ◆ 春になると越冬した病原菌が増殖し、春型枝病斑（スプリングキャンカー）を生じる。
- ◆ 病原細菌は、雨水に混じって分散し、気孔や傷口から感染する。

#### 防除のポイント

- ◆ 開花期直前にICボルドー412を散布する。（葉害を生じるおそれがあるため、開花後から8月下旬までは使用しない。）
- ◆ 春型枝病斑を見つけたら、落花期までに切り取ってほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 風当たりの強いほ場では防風ネットを設置する。

## バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

## クビアカツヤカミキリ



フラス



幼虫

株元に溜まったフラス

## 防除のポイント

- ◆ 被害が大きい樹は伐採し、破砕(チップの厚さは10mm以下を目安)や焼却することが望ましい。
- ◆ 伐採した枝や幹はほ場に放置せず処分する。すぐに処分できない場合は、ネットやビニルシート等で2重に覆う。
- ◆ 幼虫は3月下旬から中華麺〜うどん状のフラス(木くず等の混合物)を出すので注意する。
- ◆ フラスを見つけたら、千枚通しや針金等を穴に入れ、中のフラスをかき出してからロビンフッド、ベニカカミキリムシエアゾールを注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。



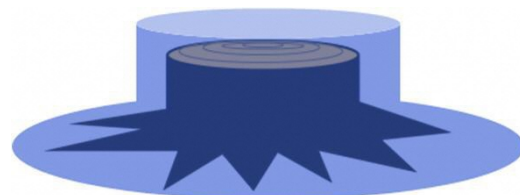
成虫

## 伐採後の切株について

なるべく伐根する

伐根できない場合は、切株をビニルシートや肥料袋等で覆う

さらにネットで2重に覆う(根部まで全て)



## 処分に伴う運搬について

- ◆ 本種は特定外来生物に指定されており、伐採樹であっても、内部に幼虫が潜んでいる場合は運搬が制限される。このため、処分のための運搬であっても市町村の指示に従うこと。
- ◆ 市町村焼却施設(もしくは市町村の清掃工場)で焼却可能な場合は、ネットで被覆する等の分散防止措置を実施の上、現地より運搬して焼却する。

## 野焼きについて

- ◆ 廃棄物の処理と清掃に関する法律第16条の2により、野焼きは原則として禁止されている。
- ◆ 一方で施行令第14条第4項において、「農業を営むためにやむを得ないものとして行われる廃棄物の焼却」については例外とされている。
- ◆ 例外に該当するかどうかは市町村によって異なるため必ず確認し、なるべく焼却施設にて焼却する。

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R5.3改訂版)」  
についてもご参照ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/318/0000000/kubiaka2303.pdf>

## たまねぎ

## 白色疫病



葉の症状

## 特徴

- ◆2～3月が比較的温暖で雨が続くと発生しやすい。

## 防除のポイント

- ◆発生が見込まれる時期に、予防散布として、ジマンダイセン水和剤、ダコニール1000などを散布する。
- ◆発生を認めたら、ザンプロDMフロアブル、プロポーズ顆粒水和剤、リドミルゴールドMZなどを散布する。

## ネギアザミウマ



成虫※

## 特徴

- ◆成幼虫が葉の汁を吸い、吸われた痕はカスリ状に色が抜けて白くなる。
- ◆タマネギえそ条斑病を引き起こすウイルス（IYSV）を媒介する。

## 防除のポイント

- ◆発生を認めたら、グレーシア乳剤（アザミウマ類）、プレオフロアブル、コルト顆粒水和剤などを散布する。
- ◆薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。



えそ条斑病※

※原図：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所  
 ＊原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑（大阪府植物防疫協会）  
 無断転載を禁ずる。



## トマト・ミニトマト(施設栽培)

### トマトキバガ

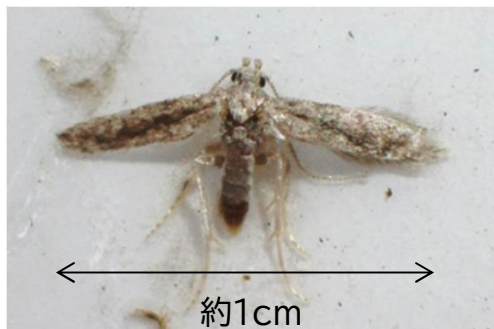


図1 府内で誘殺された成虫

#### 特徴

- ◆ 成虫(図1)は体長5～7mm。翅は灰褐色で、黒色のまだら模様が散在する。
- ◆ 幼虫(図2)は、終齢で約8mm。体色は淡緑色～淡赤白色で、頭部は淡褐色。頭部のすぐ後ろに細い黒色横帯がある。
- ◆ 成虫は夜行性で、日中は葉の間等に隠れていることが多い。卵は寄主植物の葉の裏面などに産み付けられ、終齢幼虫は土中や葉の表面で蛹化する。
- ◆ 1年に複数の世代が発生し、繁殖力が高い。
- ◆ 主な寄主植物はトマト・なす・ピーマン・とうがらしなどのナス科植物。



図2 幼虫



図4 トマト果実の被害



図3 トマト葉の被害

#### トマトでの症状

- ◆ 幼虫が茎葉の内部に潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変する(図3)。
- ◆ 果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空くとともに腐敗するため、品質が低下する(図4)。

※図2～4:出典「植物防疫所Webサイト」  
無断転載を禁ずる。

#### 防除のポイント

- ◆ 発生が疑われる場合は、速やかに病害虫防除グループや最寄りの農の普及課、JA に確認する。
- ◆ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、侵入を防止する。
- ◆ トマト、ミニトマトでは下記特殊報を参考に登録農薬を散布する。
- ◆ 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋などに入れて一定期間密閉して寄生した成幼虫を全て死滅させてから適切に処分する。
- ◆ 薬剤散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統(IRACコード)が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

詳しくは「病害虫発生予察特殊報第1号トマトキバガ」もご参照ください。

[https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/318/00000000/231031\\_tokusyuhou01\\_tomatokibaga.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/318/00000000/231031_tokusyuhou01_tomatokibaga.pdf)

## 野菜類

## コナジラミ類

タバココナジラミ  
成虫※

トマト黄化葉巻病発病株

## 特徴

- ◆ すず病の原因となる。タバココナジラミは、トマトでは吸汁による果実の着色不良、TYLCV(トマト黄化葉巻ウイルス)の伝搬、きゅうりではCCYV(ウリ類退緑黄化ウイルス)の伝搬等、様々な被害を引き起こす。

## 防除のポイント

- ◆ トマト黄化葉巻病、キュウリ退緑黄化病などのウイルス病は、感染すると株ごと除去する以外に対策がないため、媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ 施設開口部に目合い0.4mmのネットを展張する。
- ◆ ほ場内及び周辺の除草を徹底する。
- ◆ ベネビアOD(トマト、きゅうりなど)、コルト顆粒水和剤(なす、トマト、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。